

松

江と出雲で史上最大雨量を観測した日、早々と一日家で過ごすことに決める。というか、どうせ用事のない日だったから、冷蔵庫の中のもので食べると決めれば出かける必要はなくなるので、雨はあんまり関係ない。ぼんやりと現行稽古や公演のあり方について考えた。というのは、市内某サ高住で立て続けに稽古をして一週間が経ち、次まで一週間空いたので、散らかったままの反省や思いつきなど、整理しておきたくなったのである。

このところサ高住稽古はそれなりに活況で、三十分前には車椅子や手押し車とともに入居者が稽古場に姿を見せる。この勢いで来られたら、部屋に入りきらないじゃないかと心配になるのだが、毎回椅子の数だけちようどよく座っているから不思議だ。

来場への謝意を伝えた後は、「まだ三十分ありますよ」と毎回言ってしまう。開始時間を知らない、あるいはかんちがいしているかも、とどうしても考えってしまうのだ。

「はい、はい」

「だいぶん待つていただくようになりますが」

「はい、はい」

老人たちは三十分あればあれこれこれして、と考えるてしまえばくへの批判としてにこやかに座っている。

毎回来て同じ場所に座るおばあさんが、めずらしくばくばく声をかけてきた。

「子どもたちが一生懸命やっている姿見てますとね、涙が出てきます」

言葉にしていなくても、眼差しから感じていたことではある。でも、改めて聞かされると、思いに質量が伴ってハッとさせられた。落語の巧拙などどうでもいい、子どもが会いに来て懸命に語っているその時間と空間を愛おしむ。寄席じゃなくて稽古だからと、ぼくは子どもの話を遮り、繰り返させるが、それだつてどうでもいいのだ。こんなふうには不完全なものを不完全のままにさらけ出して喜んでもらえるのだつたら、稽古はどこだつてできるはずだ。トンボが雨後の水たまりへ卵産むみたいにやればいい。

うちは、アパートの四階で、近くの川はあふれたことがないので高をくくつていたら、実家は床下浸水していた。近所のおばあさんは、市職員に負われて避難した。ゲリラ豪雨はこのところ毎年だし、引越後は、高齢者の安否確認や避難を考えておく必要がありそうだ。日頃のコミュニケーションが要となるだろうから、歩けぬ老人の家では、子どもたちの手を借りて、玄関先で小咄でもやらせてもらおうか。笑い声で安否が確認できたらこれほど確かなことはない。



北海道への旅、三度目  
木幡智恵美

14

朝、本当なら函館のホテルで目覚めているはずなのに思いながら起き上がる。旅行日程が終わる予定日まで、こんな朝が続くのだろうか。

幸いというか、北海道に行けなくなったお陰で、孫たちが通う玉湯学園の運動会を見に行くことができた。一年生から九年生までの運動会で、二日にわたって行われる。一日目は天気にも恵まれ、寛大が走ったり実歩が踊ったりする姿を見られたが、二日目は雨で延期、その日は休校になった。娘としては、事故に遭つたために私がフリーになり、子どもたちの面倒をみてもらえるとあつて助かつたことだろう。

その日、娘が早退して子どもたちを病院に連れて行ったあと、車屋さんのTさんが来られた。保険会社とやり取りをしている途中経過の報告を聞く。続いて、壊れた車は修理しようがなく廃車になるからと、代わりの車の話も進めることになった。Tさんが、「身体の方は大丈夫ですか」と聞かれ、「先日整形外科で診てもらいましたが、大丈夫でした」と夫が答える。そしたら、Tさんが、「あの壊れ方からして、お二人とも怪我がないのが不思議ですね」と、目を大きく見開いて言われる。それを聞いた夫がすかさず、「いや、後ろの車が突っ込んで車体が浮いたようになったから身体への衝撃が少なかつたんじゃないですかね」と、JAFの方が言っていたことをさも自分の見立てのように話しているのがおかしかつた。

「で、次の車のことですが」と、Tさんが話し出すと、夫は、「前のと同じでいいよね、色も」と、私に同意を求める。どうしてそう簡単に言えるのだろうか。「いや、ちょっと」と言葉を濁した。事故した車と同じ形なのは良いとしても、色もというのに抵抗があつた。まだあの壊れた車体の映像が脳に焼き付いているし、ぶつかった時の衝撃が蘇つてきたのだ。

返事は今すぐでなくていいとTさんが帰られた後、買い物を出た。歩きながらTさんの言葉が頭の中を巡る。「あの壊れ方からして」ということは、あの車だつたからこうして歩いているのかも。あの車が我が身を犠牲にして私たちを守ってくれたのか。そう思うと、シルバーの車が急に愛おしくなつてきた。

30代フリーター ジイさん、暑いのに、朝の散歩まだ続けているのか。年金生活者 散歩でいちばん気をつけているのは、暑さや寒さより、すれ違う相手と目が合わないようにすることだ。視線が正面衝突したとたんに、心に亀裂が走り、歩くことで上向き始めていた気分を再び低空飛行に向かわせる。だから、まず相手を見ないようにしないといけない。見れば見返される危険が増す。

30代 やつかいな散歩の仕方をしてるんだな。

年金 本質的なことを言うと、見ることは見られることでもある。それは人間や動物を見る場合だけに限らない。自然物を見るときも、人工物を見るときも、私たちはそれらから見られている。ふだんはそう感じないが、ふとした瞬間に花や山が、看板や窓がこちらを見ていると感じることがあるだろう。

30代 錯覚ならあるかもしれない。

年金 精神分析家のラカンは若いとき

それが自分にはほとんど見えていないのに、電柱にぶつかるとわかるのか。電柱のほうが見て知っているから。私はその視覚像を無意識のうちに想定して歩く方向を修正する。

30代 無生物に見られているという実感を持ったことがない。

年金 ラカンは次のようにも言っている。「ものの側に眼差しがある、つまりものの方が私を視ている、しかしそれでも私はそれを見ている。まさにこうした意味でこそ『人は見ないために目を持つ』という福音書の言葉は理解されるべきです。何を見ないためでしょう。まさに、ものが人々を視ているのを見ないためです」（前掲書）

ふだん「ものの方が私を視ている」ことは「実感」されない。それは別の「実感」、すなわち目の作用による「実感」によって覆い隠されているからだ。ラカンはそれを「人は見ないために目を持つ」という福音書からの引用によって言い表している。

ものに見られるとはどういうことか

漁を体験したことがあり、そのとき、日差しを受けながら波間に漂う缶詰の缶を見て、缶のほうもこちらを見ていると考えたことを打ち明けている（『精神分析の四基本概念』小出浩之ほか訳）。「その缶は光点という意味で私を視ているのです」と。

マルクスは、人間は自然に働きかけるとき、同時に自然に働きかけられる、と考えた。人間は自然を人間化する、と同時に、その自然によって自然化される、と。感覚にこの自然哲学を当てはめるなら、触覚が最も実感的に納得できる。何かを触ることはそれから触られていると感じることもある。

これに対し、視覚や聴覚、嗅覚や味覚の場合はそうした実感があまりない。しかし、見るためには身をさらさなければならぬ。目だけを身から離して対象物に近づけることはできない。見られる対象となることは避けられない。聞く場合も、嗅ぐ場合も、味わう場合もそれは同じだ。

30代 比喩としてならそう言えるかも

を、わずかでも「実感」に近い言い方で示すために、立方体を見る場合を想定してみる。立方体は6面体だが、私たちの目はそのうち最大3つの面しか見ることができない。つまり3つの平行四辺形が重なっているのが見えるだけだ。にもかかわらず、それを6つの面を持つ立体物として見ることができ

しれないが。

年金 ラカンは同じ著作で見ることについて「おそらく私の目の底には絵が描かれているでしょう」と言い、「しかし、私はといえばその絵の中にいます」とも語っている。「光であるものが私を視ています」と。「そしてこの光のおかげで私の目の底には何かを描かれます」と結論づける。

見られることなしに見ることはできない。彼はそう言っている。なぜなのか。朝の散歩の途中、歩いて行く先に立っている電柱を見ながら考えた。ラカンの言う通りなら、自分はこの電柱に見られていることになる。そのさまを想像してみた。電柱は、私自身にはほとんど見えていない私の顔や胴体や四肢の前面を見ている。それらがこのまま進んで来れば自分につながる位置関係にあることも見ている。

一方、私は円筒形の電柱の半円分を見ていて、このまま進んでいけば、自分の胴体や四肢の前面がそれにつながることも承知している。では、なぜ、

きるの、目には映らない裏側の3つの面を見ている、向こうからの視線を想定しているからだ。

この想定は、目の作用による「実感」に覆われているので、ふだんは意識されることがない。ものに見られているのに、それを「実感」できないのは、この立方体の場合と同様と考えることができる。視線の向かう先が異なるだけに、前者の場合もものを見ている自分に、後者の場合は立方体に向かつている。

歴史をさかのぼれば、それが「実感」される段階があった。「自然物はみな擬人としての神」とみなされた「アフリカの段階」だ（吉本隆明『アフリカの段階について』）。そこでは生物も無生物も「擬人としての神」だから、それらに見られることは普通のこととして「実感」されていたはずだ。現在は科学的なものの考え方がそうした信仰を後退させ、ものに見られる「実感」は錯覚や精神の失調によってしか得られないものになった。

ニュース日記 930  
中村 礼治

## 見ることと見られること